

僕（しもべ）としてのキリスト者

「キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから・・・神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ。」これは、ローマのキリスト者たち宛てに書いた使徒パウロの「ローマの信徒への手紙」の書き出しの言葉である。

まったく初めての人に手紙を書くとき、私たちはまず、自分がどういう者であるか、相手に一番よく知ってもらいたい自分の身分（たとえば、どこそこの社長であるとか、或いは医者であるとかいうように）を紹介するのが普通である。ところが、大変驚くべきことに、パウロは自分のことを紹介するにあたり「使徒」というよりも、まず自分は「キリストの僕（しもべ）」であると紹介している。驚くべきことに、と言ったのは、ここで「僕」と訳されている語の原語は“ドゥーロス”で、これは「奴隷」を意味する言葉であるからである。彼が、自分の気持ちを一番よく表わすものとして、自分をキリストのドゥーロス（奴隷）であると言ったとき、それはどういうことを意味したのであろうか。

確かにそこには、自らを低くする彼の謙遜な態度が表わされていることはいうまでもない。使徒パウロは、主イエスとその弟子たちに教えられた僕の道（マルコ10：42～44）を生涯貫いて生きた人であった。しかし、彼がキリストの僕と自称するとき、それは単に彼の謙遜な態度を表すだけでなく、そこにはもっと深い意味が込められていた。

ローマ書の優れた注解書を著わしたニグレンが言うように、「彼にとってこのことばは、彼の生命の最大にして、また最も革命的な現実を表現することばだったのである。すなわち、それは、彼のダマスコ途上における革命的变化をもたらした、あのキリストの恩寵のみ業に対する、彼の感謝と信仰の告白を意味したのである。

パウロはしばしば、罪によって支配されている人間の姿を「奴隷」という言葉で表している。奴隷状態にがんじがらめにされ、その冷酷な主人の意のままに支配されている奴隷のように、神から離れた人間は、その本性において罪の支配下にあり、そのため必然的に罪を犯す。これが人間の現実であるとパウロは言う。彼が、自分はキリストの僕であると言うとき、その言葉に含蓄されているのもそのことである。「私はかつて罪の奴隷であった。キリストを否定し、キリストの教会を撲滅しようとした張本人であった。しかし、キリストはこのような私をも憐れんで下さり救いの恵みの中に招き入れて下さった。今や、私は罪の束縛から解放され、キリストの僕（ドゥーロス）とされた。キリストこそ私の贖い主であり、私の救い主である」、と。

キリストにおける罪の贖いと赦し、罪の奴隷からキリストの僕への革命的变化、これがパウロが体験したことであった。それ以来彼は、キリストの僕であることを唯一の誇りとして生きた。「今わたしは、人に喜ばれようとしているのか。それとも神に喜ばれようとしているのか。あるいは、人の歓心を買おうと努めているのか。もし、今もなお人の歓心を買おうとしているのだとすれば、わたしはキリストの僕ではあるまい」（ガラテヤ1：10／口訳）と、いつも自分に問い掛けつつ、キリストの僕として徹底して忠実に福音宣教の使命に生きた人であった。